

史料・日本近代と「弱者」◆第1集

高橋
前田 博智
石川 衣紀 編

現代日本教育の「格差・貧困」「発達・障害」を考える原典史料！

特別支援・特別ニーズ教育の源流

—鈴木治太郎の教育改革と適能教育論

◆編集復刻版

全9巻・別巻1

知能測定はどこまでも眞の児童愛の動機から出なくてはならぬ。教育は価値実現の助成作用である。測定はその人の幸福を増進するために実行するので：何所までも、その子供の人格を尊重してこそよい結果が得られる。各々其の長所を認めて短所はせめず、その児童に勢をつけてやる様に親切のあるものでなくしては、このテストは危険千万である。—「智能測定と小学校教育」より

全巻完結

刊行にあたつて

高橋 智
(東京学芸大学教授)

高橋 智

非行、養護問題、各種のアレルギー症状、慢性疾患・病気療養などの子どもの心身の発達における様々な「ライフハザード」が示すように、子どもの生活と学習・発達をめぐる「格差・貧困」の諸問題が激化・深刻化している。

▼シリーズⅡ史料・日本近代と「弱者」

本シリーズでは「弱者」を、なかでもとりわけ困難を抱える「障害者、病者、子ども」に対象を限定し、国民国家の成立と近代化の過程で「弱者」がどのように誕生し、また取り扱われてきたのかを典型的に示す史料群を編纂し、必要な範囲において解説を行うものである。

本シリーズでは、「弱者」を、なかでもとりわけ困難を抱える「障害者、病者、子ども」に対象を限定し、国民国家の成立と近代化の過程で「弱者」がどのように誕生し、また取り扱われてきたのかを典型的に示す史料群を編纂し、必要な範囲において解説を行うものである。

現代の市場化・規制緩和、構造的不況や失業・不安定雇用等のなかで子どもの生活と学習・発達をめぐる「格差・貧困」が深刻化し、多様な困難・ニーズを有する子どもの急増に対して特別支援教育の枠では收まらないことは明らかである。

特別ニーズ教育とは、従来の特殊教育・障害児教育と通常教育という二分法的な教育対応ではなく、子どもの有する「特別な教育的ニーズ(通常の教育的配慮に付加して特別な教育課程、教育施設・設備、専門教職員配置、教材・教具等を必要とするニーズ)」に対応した特別な教育的ケア・サービス(医療・福祉・就労等の関連サービスを含む)の保障を子ども固有の権利として承認しながら、特別な教育的ニーズを有する子どもの諸能力と人格の発達保障を促進するための教育的ニーズをもつて「特別な教育的ニーズ」として共同体の相互扶助の対象として包摂されていたが、国民国家の成立と近代化の過程で、国民国家の構成員としての「資格(義務と権利)」をもち得ない「欠格対象」「非国民」として制度化され、排除された。

今世紀の社会の課題は、多様な弱者を包摂した「インクルージョン社会」すなわち国民国家と国民の枠を超えて、弱者一人ひとりの尊厳と価値を認め、彼らが眞に権利主体としての社会参加や彼らの多様な差異・ニーズに応じた発達保障が担保されるような共生・協働的な市民社会を展望することである。かかる視座に立つて本シリーズでは弱者の歴史的解明をめざすものである。

れている。

それに対して、日本の義務教育段階における特別支援教育対象の児童生徒はわずか二・三%(二〇〇八年)に過ぎない。これは特別な教育的ニーズを有する子どもが日本に少ないことを意味するのではなく、教育財政面での貧困・制約から特別支援教育の対象が依然として「旧特殊教育制度の障害児+LD・ADHD・アスペルガー症候群・高機能自閉症に狭く限定され、通常の学校・学級に在学する多様な困難・ニーズを有する子どもへの特別な教育的配慮がきわめて不十分であること」を示すものである。

現代の市場化・規制緩和、構造的不況や失業・不安定雇用等のなかで子どもの生活と学習・発達をめぐる「格差・貧困」が深刻化し、多様な困難・ニーズを有する子どもの急増に対して特別支援教育の枠では收まらないことは明らかである。現行の特別支援教育制度から、さらに特別な教育的配慮を要するすべての子どもの学習と発達の権利保障を進める特別ニーズ教育への移行とその制度化を早急に実現すべき時期にきている。

▼鈴木治太郎の「子どもと発達の貧困」の視座と特別な教育的配慮の取り組み

松本伊智朗(一〇〇八)は「子どもの貧困」をとくに重視する理由として、子どもをめぐる不利の連鎖・固定化が「成長と発達の機会を阻害する」という意味で、深刻であり、「子ども貧困」は「発達の貧困」であることを挙げている。

こうした「子どもと発達の貧困」という視点をもち、戦前期の大坂市の小学校において特別な教育的配慮の先駆的活動を行なっていた人物として鈴木治太郎(すずき・はるたろう、一八七五—一九六六)を挙げることができる。鈴木は「鈴木・ビネ式知能検査法」の開発者として有名であるが、彼が生涯になした活動は多岐にわたり、大阪府師範学校附属小学校「特別教室」での学業不振児教育の実践、知能検査法の開発と標準化、大阪市の小学校における特別学級編制の制度化、大阪

▼特別ニーズ教育とは

近年の日本では、学習困難、不登校・不適応、いじめ、被虐待、

市立児童教育相談所および大阪市立思斎学校(日本で最初の公立の知的障害児学校)の設置と運営という一連の活動を通して、子どもの生活と発達における多様な「貧困」に対応した特別な教育的配慮の開発に努めた人物であった。

鈴木は一九一七(大正六)年から一九二九(昭和四)年まで大阪市視学として活動し、特に在任期の前半は大阪市児童の不就学問題の解明と対策立案に尽力をしている。当時の大阪市は、急激な産業化とともに多くの人口爆発を背景に貧困・児童労働・スラム拡大・不衛生などさまざまな都市問題が噴出し、教育現場においても不就学・二部教授・過大学級といった問題が顕在化していた。鈴木はそのような厳しい貧困状況における子どもの生活と発達の問題に早くから目をむけ、子どもの各種の困難の把握と支援の実現に努めたのである。

今日の貧困問題と当時の貧困状況を同列に論じることはできないが、後述のように鈴木の一連の特別な教育的配慮の理論と実践、特に知能測定法を利用した児童研究と支援体制の構築は、当時の多様な「貧困・困難」を子どもの観点に立つて捉え、子どもの「生活と発達の貧困」の具体的な解決策を個々の状況に応じながら案出する活動(=特別な教育的配慮のシステム開発)であつたと評価することができる。

▼本史料集編纂のねらい

本史料集は、戦前に鈴木治太郎が取り組んだ一連の特別な教育的配慮を「生活の貧困」「発達の貧困」という二つの教育問題への対応策としてとらえなおし、当時の子どもをとりまく多様な「貧困・困難」に彼がどのように対応していたのかを検討しながら、その現代的意義を明らかにすることを編纂のねらいとしている。この課題にもとづき、本史料集では鈴木の活動を「生活の貧困」「発達の貧困」の二つの枠組みからとらえ、それぞれの貧困と密接に関係した児童の多様な困難・ニーズを鈴木がどのように把握し、どのような教育対策・対応を開発したのかを明らかにしていく。

【鈴木治太郎と「生活の貧困」の実践】

(1) 鈴木が大阪府師範学校附属小学校「特別教室」で行つた学業不振児への個別実践の内容を検討し、「生活の貧困」とりわけ「家庭環境の貧困」から生じていた児童の学習困難をどのように把握し、いかなる対応を行つたのかを明らかにした。

(2) 一九一七(大正六)年に関一大阪市助役(のち大阪市長)に抜擢されて大阪市視学となつた鈴木が、当時の大阪市における不就学・二部教授・過大学級をはじめとした劣悪な教育条件の問題をどのように把握し、教育救済事業を通して都市下層社会における子どもの貧困とどのように向き合つたのかを明らかにした。

【鈴木治太郎と「発達の貧困」の実践】

(3) 鈴木による知能測定法標準化実験の具体的過程と意義を検討し、子どもの発達における「貧困・困難」の理解をどのように深化させたのかを明らかにした。

(4) 一九一三(大正二)年以降、鈴木の主導のもとに大阪市教育部によって計画設置された同市特別学級編制について、それが通常教育の枠組みにおける「発達の貧困」への特別な配慮のひとつであつたという視点から検討し、実践内容の特徴と意義を明らかにした。

(5) 大阪市における学業不振児調査、特別学級や児童教育相談所での実践から明確にされていく「障害の重い子ども」の教育対策・対応の必要性に関して、鈴木がどのように認識・構想したのかを検討し、「発達の貧困」へのより制度的な対応と鈴木との関わりを明らかにした。

(6) 上記の作業を踏まえたうえで、鈴木が児童の多様な貧困・困難への教育的配慮を実現するために提起した「適能教育」論の構造・内容・意義について検討し、それが鈴木の特別な教育的配慮のシステム開発にどのように位置づいたのかを明らかにした。

(たかはし・さとる)

推薦

「教師の教育学」解説 のための史料群

木村 元

(一橋大学大学院社会学研究科教授)

鈴木治太郎といえば個別知能検査である「鈴木・ビネ」法の生みの親として有名である。しかし名前は知られているが、その人物はとなると意外にも知られていない。このたび、緑蔭書房から鈴木治太郎の史料集が刊行される。そこには知能検査の制作者としての鈴木の歩みが詳しく見て取れ、その賛否を含めて多大な影響を与えてきた知能検査に関する研究のための重要な情報を探求している。

のみならず興味深いのは、鈴木が学校教育の定着に伴つて様々な現れてくる現場の問題を解決しようと知能検査を始め様々な方法を試みていたということである。鈴木が教師として歩んだ時期は、日本の社会が実質的に学校を受け入れ、学校に通うことが当たり前になつていく時期である。それに伴つて、教師は学習困難な子どもも含めて多様な子どもたちに向き合つことが課題とされた。にもかかわらず日本の講壇教育学はその指針を与えてくれない。その中で自らの教育学を作り上げていく嘗みの結果として知能検査があつた。^(ダゴン)鈴木の実践は、現場の困難を前にした無数の教師たちの奮闘の一つであり、教育の事実から教育学を作り上げようとする動向、すなわち教育科学の動きとも連動しながら教育界で大きな存在として位置づいていく。

こうした意味で、本史料群は、無数に存在した「教師の教育学」の形成の一助として、障害児教育はもとより教育史や学校史研究などを始め教育学全般に寄与するものであるといえよう。

(さむら・はじめ)

収録史料一覧

教具研究付「教育品展覧会につきて」

(鈴木 同・九卷四号 一九二一年)

補習教育概説(鈴木 同・九卷六号 一九二一年)

改正後の高等学校(鈴木 同・九卷二号 一九二一年)

懲罰の心理を論じて幼年、少年、青年の教育に及ぶ

(鈴木 同・一〇卷二号 一九二二年)

明治期の一的教育批判と「特別学級」の試み

明治二〇年代の欧米の諸教育学説の流入を契機に明治政府の画一的教育を批判し、児童の教育実態を把握するために「特別学級」を試み、その実践の理念として、個々の天分に応じた合理的な適能教育の必要性を説いた適能教育論を展開させていく。

小学期に於ける男女児童心性の比較研究上・下

(鈴木治太郎 「児童研究」三卷二号・四号 教育研究所 一九〇〇年八月・一〇月)

成績不良児取扱ニ関スル実験報告

(大阪市役所教育部・鈴木 一九二三年一〇月)

教育の実験一、二(鈴木 「日本之小学教師」一一卷一二二号 国民教育社 一九〇九年一月)

大正期大阪の都市教育問題1

第一次大戦後の大阪市の工業化に伴う都市問題や社会的矛盾の深刻化は都市教育問題として子供にも深刻な影響を及ぼしていく。この時期鈴木は大阪の都市児童の教育問題に関する多くの論稿を書いている。この他、大阪市視学として大阪市の教育改善に児童の不就学実態の調査の必要性を提唱して着手した「二大就学実態調査」報告書を収録。

鈴木の代表的著作の一つ。都市教育の重要性を認識し、都市の実態を見据えながら大阪市の小学校教育の構築を主張したもので、大阪市視学に異例の抜擢をされるきっかけとなつた。

一眼の視覚につきての研究

教授訓練雑誌 鈴木 「初等教育教材研究」六卷六号 大阪府天王寺師範学校 一九〇八年

色の感覚特に色盲につきて

(鈴木 同・七卷七号)

『初等教育最近実際問題の研究』増補再版「付録 大阪府天王寺師範学校付属小学校の近況」
(鈴木治太郎 宝文館 一九二一年五月)

第3巻

知能測定法標準化実験1

観念より意思を養ふ方法

(鈴木 同・一〇卷四号・五号 一九二二年)

習慣より意思を養ふ方法(鈴木 同・一〇卷九号 一九二二年)

注目すべき新実業学校の出現

(鈴木 「国民教育教材研究」一四卷三号 一九二六年)

子供の喧嘩と教育(鈴木 同・一四卷四号 一九二六年)

都市小学校教育問題(1)~(11)

(鈴木 同・一四卷五号~一五卷一〇号 一九一六年~一九一七年)

吾人は国家の為にこの方面の発達を希望す

(鈴木 同・一五卷一号 一九一七年)

学年末に於ける児童成績品の整理

(鈴木 同・一五卷三号 一九一七年)

都市の教師の研究に待つべき卒業生指導問題

(鈴木 同・一五卷臨時増刊号 一九一七年)

鈴木は大規模な標準化実験で「鈴木・ビネ式知能測定法」を完成させたことでも著名であるが、特別学級編制を中心とした適能教育の推進には児童の適切な判別も不可欠な要素であると考え、大正末より一九三七年にかけて標準化実験(第一次)を重ねた。

『智能発達検査法略説』

(大阪市役所教育部・鈴木治太郎 一九二四年五月)

『智能測定尺度ノ実験的統計的基礎』

(大阪市役所教育部・鈴木 一九二五年三月)

『智能測定と児童の適能教育』

(大阪市役所教育部・鈴木 一九二九年三月)

『大阪市教育部に於ける児童の智能発達測定尺度の正確度についての考察』(大阪市役所教育部・鈴木 一九二九年四月)

『智能測定と小学校教育』

(鈴木 「我が郷土」滋賀県教育会 一九三三年三月)

『精神觀察並に精神検査の活指針』

(大阪府学務課・鈴木 一九三四年四月)

『智能測定尺度の客観的根拠』(鈴木 一九三六年九月)

個別の智能測定法に就て(鈴木「精神衛生」三卷一一号 一九三七年一二月)

第4巻

知能測定法標準化実験2/付録

対象年令の拡大!!第二次標準化実験に専念するため視学を辞した鈴木が過去九カ年の調査研究の成果をまとめたもの。付録は知能測定法標準化へ至る研究の回想記等を収録。

『初等教育最近実際問題の研究』

(鈴木 治太郎 宝文館 一九二〇年一〇月)

特別支援・特別ニーズ教育の源流

鈴木治太郎の教育改革と適能教育論

編者

高橋 智

（東京学芸大学教授）

前田 博行

（小平市立小平第一小学校教諭）

石川 衣紀

（白梅学園大学子ども学部助教）



大阪市立児童教育相談所

本史料集の特色

全9巻
[別巻1]

▼近代日本の教育先進地域＝大阪における都市教育問題と小学校教育改革、特別な教育的配慮と特別学級編制、知的障害児教育の制度化のプロセスを系統的にたどることができる。

▼日本の代表的な「知能検査」＝「鈴木・ビネ式知能測定法」研究の重要な史料であり、日本心理学史に不可欠な文献。

▼別巻を付し、鈴木治太郎の業績と本史料の歴史的意義を明らかにした。鈴木治太郎研究の最初の著作。

◆推薦＝木村 元（一橋大学大学院社会学研究科教授）

◆おすすめしたい方

日本教育史・障害者教育史・社会事業史・心理学史の研究者、大学・公共図書館、教育研究機関など

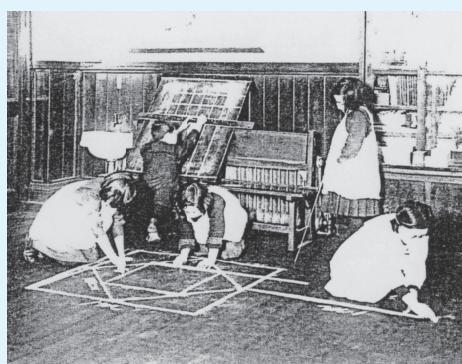
別巻

「優秀児」調査・研究／付＝鈴木治太郎・
喜田正春往復書簡集（抄録）
高橋智・石川衣紀・前田博行著
戦前における鈴木治太郎の小学校教育改革の実践と特別な教育的配慮のシステム開発

◆A5判・上製・総約4,000ページ

◆予定価＝本体100,000円+税〔分売不可〕
ISBN978-4-89774-542-8

◆史料・日本近代と「弱者」第2集
高橋智（東京学芸大学教授）編
河合隆平（金沢大学准教授）編
日本近代と困難児・障害児保育史料集成（仮）



「特別学級」の授業風景（お手玉を使用した実測練習）

緑蔭書房

〒173-0004 東京都板橋区板橋1-13-1 ☎03(3579)5444・振替 00140-8-56567

申込書	高橋智・前田博行・石川衣紀編／緑蔭書房刊 特別支援・特別ニーズ教育の源流（全9巻・別巻1） ISBN978-4-89774-542-8 創本体 200,000円+税（分売不可）		お申し込み書店名
	お名前		
	ご住所		
	お電話		